The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	妬みのサブタイプ理論とその測定法の検討 ： 日本においても悪性妬みと良性妬みは存在するか？
Author(s)	中井, 彩香; 沼崎, 誠
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 77-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70544
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

妬みのサブタイプ理論とその測定法の検討

―日本においても悪性妬みと良性妬みは存在するか？―

中井　彩香(首都大学東京人文科学研究科)
沼崎　誠(首都大学東京人文科学研究科)

本研究は、妬みにはネガティブな行動を導く悪性妬みと、ポジティブな行動を導く良性妬みという 2 つのサブタイプがあるとするサブタイプ理論が、悪性妬みと良性妬みに該当する言葉のない日本においても支持されるか調べた。過去の妬み場面を想起させ、当時の感情や動機、行動を回答させた。妬みを単一の感情とするモデルと 2 つの感情とするモデルを比較したところ、後者のモデルが適切であることが示された。悪性妬みは他者に向けられたネガティブ感情(敵意)を含む感情であり、他者を低める行動を導く一方で、良性妬みは自己に向けられたネガティブ感情(劣等感)を含む感情であり、自己を高める行動を導くことが確認された。相手の成功を内的要因に帰属するほど、悪性妬みが生じにくく、良性妬みが生じやすいという先行研究の結果も再現された。この結果は、妬みのサブタイプ理論は言語の種類に依存しないことを示唆している。また、本研究のもう 1 つの貢献点として、悪性妬みを感じたときは問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングの両方が行われるが、良性妬みを感じたときは問題焦点型コーピングが行われやすいことが明らかにされた。

キーワード：妬み、社会的比較、原因帰属、問題焦点型コーピング、情動焦点型コーピング

問題

私たちは、他者が自分よりも成功している状況を見た際に様々な感情を経験する。妬みはその 1 つであり、優れた他者と自分を比較することで生じる不快な感情である。従来、妬みは優れた他者への敵意を含み、社会的に望ましくない行動を導くと考えられていた(e.g., Smith & Kim, 2007)。しかし、近年ではポジティブな行動を導く妬みの存在が注目されており、妬みには社会的に望ましくない行動を導く悪性妬み(malicious envy)と、社会的に望ましい行動を導く良性妬み(benign envy)という 2 つのサブタイプが存在するというサブタイプ理論が提唱されている(Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, 2009)。しかし、サブタイプ理論に基づいた研究のほとんどは、「悪性妬み」と「良性妬み」に該当する言葉のある言語圏で行われており、妬みにサブタイプを想定できるかどうかは言語の種類に依存している可能性がある。また、サブタイプ理論には、妬みが適切に測定されていない、情動焦点型コーピングがモデルに含まれていないという問題点が指摘されている(Cohen-Charash & Larson, 2017)。そこで、本研究では、新たに作成した妬みを測定するための項目を用いて、悪性妬みと良性妬みに該当する言葉のない言語圏である日本においても、妬みのサブタイプ理論が支持されるか調べる。

妬みとは

妬みは、業績や能力、所有物において、他者が自分よりも優れている状況で生じる不快な感情(e.g., Parrott & Smith, 1993)と定義されている。例えば、自分は昇給できなかったのに同僚は昇給した、自分よりも友人の方がテニスの才能がある、といったように優れた他者と自分を比較する状況で私たちは妬みを感じ、相手に対してムカついたり、いらつきを感じたりする。

妬みは、社会的比較によって生じる自己意識的感情の 1 つとされている。Smith(2000)によれば、社会的比較によって生じる感情は、比較の方向性、感情の性質、注意の方向性という3つの観点から分類することができる。比較の方向性とは優れた他者と比較するか(上方比較)劣った他者と比較するか(下方比較)を示し、感情の性質とは他者と自分が感じる感情の感情価が一致しているか(同化的)一致していないか(対比的)を示し、注意の方向性とは注意が自己に向けられているか(自己焦点)他者に向けられているか(他者焦点)自己と他者の両方に向けられているか(自他焦点)を示している。Smith(2000)のモデルによると、妬みは、優れた他者と比較した際(上方比較)、劣った自己だけでなく優れた他者にも同時に注意が向けられているとき(自他焦点)に生じる、ネガティブな(対比的な)自己意識的感情だと考えることができる。

妬みと嫉妬

妬み(envy)は、嫉妬(jealousy)と等しい感情だと考えられることがあるが、対象の獲得状況と関わる人数という 2 つの点で異なることが指摘されている(Smith & Kim, 2007; Parrott & Smith, 1993)。妬みは、他者が所有している優れた対象を自分が獲得していない状況で生じる感情であり、2 人の人物が関与する。一

方、嫉妬は、自分が獲得している重要な他者との関係性を第三者に奪われることを恐れるときに生じる感情であり、3 人の人物が関与する。恋愛場面を例に挙げると、友人には恋人がいるのに自分には恋人がいない状況で生じる感情は妬みであり、自分の恋人を友人に奪われてしまう恐れのある状況で生じる感情は嫉妬であると考えることができる。

このように、妬みと嫉妬は異なる状況で生じる感情だとされているが、日常生活では混同して使われているように見える。Parrott & Smith(1993)では、参加者に妬み、あるいは嫉妬を感じた経験を記述させ、「欲しいものを所有している他者」に焦点を当てた記述を妬み経験、「関係性の喪失、もしくは喪失の脅威」に焦点を当てた記述を嫉妬経験として分類している。その結果、妬みを感じた経験の中には、嫉妬経験が 10.5%しか含まれなかったのに対して、嫉妬を感じた経験の中には、妬み経験が 58.9%も含まれていた。この結果より、嫉妬の内容の中には高頻度で妬みが含まれているが、妬みの内容の中に嫉妬が含まれることはほとんどないことが示唆された。前述した、「自分の恋人を友人に奪われてしまいそうな恐れがある」という嫉妬が生じる状況は、同時に「自分が持っていない異性としての魅力を友人は持っている」という妬みが生じる状況を含んでいる場合が多いのだと考えられる。

妬みのサブタイプ理論

従来、妬みは優れた他者への敵意を含み、社会的に望ましくない行動を導くと考えられていた(e.g., Smith & Kim, 2007)。妬みは一般的に望ましくない感情だと考えられており(Schoeck, 1969)、キリスト教では 7 つの大罪の 1 つとされている。実際に、妬みを感じることで、いじめや悪口など他者を傷つける行動を行う(澤田・新井, 2002a; Van de Ven et al., 2009)、相手に協力しなくなる(Parks, Rumble, & Posey, 2002)など、社会的に望ましくない行動をとることが示されている。

しかし、近年では、他者が獲得したものを自分も同じように獲得しようとする(Crusius & Mussweiler, 2012; Van de Ven et al., 2009)など、ポジティブな行動を導く妬みの存在が注目されている。社会的比較によって生じた、不快な感情である妬みは、優れた他者を低める、あるいは劣った自己を高めることで両者の差を縮め、和らげることができる。Van de Ven et al.(2009)は、妬みという単一の感情が状況に応じて異なる行動を動機づけるのではなく、妬みには悪性妬みと良性妬みという2つのサブタイプがあり、それぞれが異なる行動を動機づけるというサブタイプ理論を提唱した。この理論によると、悪性妬みは強いいらつきを含み、優れた他者を傷つけることを目標とした行動を生じさせるのに対して、良性妬みはネガティブな感情であるものの、優れた他者に対しては好意を感じ、自分の状況を改善することを目標とした行動を生じさせるとされている。

Van de Ven et al.(2009, Study1)では、オランダ人の参加者に対して、過去に悪性妬み(*afgunst*)、あるいは良性妬み(*benijden*)のどちらかを感じた場面を想起させ、当時の感情、動機、行動について尋ねている。その結果、悪性妬みを想起した参加者と、良性妬みを想起した参加者では、動機と行動だけでなく、感情においても質的な違いが見られた。悪性妬みを想起した参加者では、「いらつきを感じた」、「他者から優れたものを奪いたいと思った」、「他者の地位を傷つけようとした」などの項目で得点が高かったのに対して、良性妬みを想起した参加者では、「他者への賞賛を感じた」、「自分の状況を改善しようと思った」、「積極的に行動し直した」などの項目で得点が高かった。この結果により、妬みという感情が質的に異なる2つのタイプを持つことが明らかにされた。

悪性妬みと憤慨

従来の妬み研究で対象とされてきた、優れた他者への敵意を含む妬み、すなわち悪性妬みは、憤慨との関連性が指摘されている。悪性妬みと憤慨はどちらも不相応さの知覚によって生じる感情であるが、悪性妬みは他者の優位性の知覚によって生じるのに対して、憤慨は道徳的な不正の知覚によって生じるとされている(Ben-Ze'ev, 2002)。また、Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters(2012)では、悪性妬みと憤慨では、行為の主体性の評価が異なることが示されている。「自分はテニスの選抜選手に選ばれなかったのに友人は選ばれた」という状況を例に挙げると、コーチの決定によって友人が選抜された(友人の行為の主体性が低い)場合は悪性妬みが生じ、友人が試合成績をごまかしたことによって友人が選抜された(友人の行為の主体性が高く、かつ不正を行なっている)場合は憤慨が生じると考えられる。

良性妬みと賞賛

Van de Ven et al.(2009)が提唱した良性妬みは、優れた他者に対してネガティブな感情を抱かないという点で、賞賛と似ているように見える。彼らは、良性妬みと賞賛は、どちらも優れた他者に遭遇したときに生じる感情であるが、良性妬みは社会的比較によって生じるのに対して、賞賛はそうではないことを明らかにしている。良性妬みは、優れた他者と劣った自己を比較することで生じる、不快な感情であり、状況を改善する行動が動機づけられる。一方、賞賛は、優れた他者と遭遇することで生じる、快適な感情であり、状況を改善する

行動を動機づけることはない。

妬みを表現する言葉

妬みに、悪性妬みと良性妬みという 2 つのサブタイプを想定するにあたり、妬みを表現する言葉の種類が考慮されている。世界には、英語(*envy*)やスペイン語(*envidia*)、イタリア語(*invidia*)のように、妬みを表現する言葉が 1 つしかない言語と、オランダ語(*afgunst, benijden*)やポーランド語(*zawiść, zazdrość*)、タイ語(*rìt-yaa, it-chɑ a*)のように、妬みを表現する言葉が複数ある言語が存在する。後者の言語圏では、一般的に悪性妬みと良性妬みが概念的に区別されている。例えば、オランダ人にとって、"*afgunst*"を自分が感じていることを認めるのは難しいが、"*benijden*"を感じていることは自由に表現される。"*afgunst*"は社会的に望ましくないとされる悪性妬みに該当し、"*benijden*"は社会的に望ましいとされる良性妬みに該当すると考えられる(Van de Ven et al., 2012)。

Van de Ven et al.(2009, Study2, 3)では、悪性妬みと良性妬みに該当する言葉の存在しないアメリカとスペインにおいても、サブタイプ理論の検証を行っている。Study2 では、アメリカ人の参加者に対して、過去に妬み(*envy*)を感じた場面を想起させ、当時の感情、動機、行動について尋ねている。Study3 では、スペイン人の参加者に対して、毎晩その日に妬み(*envidia*)を感じた経験をしたかどうかと、経験をした場合のみそのときの感情、動機、行動について尋ねる調査を 2 週間に渡り行っている。その結果、妬みを感じた場面における感情、動機、行動が、悪性妬みと良性妬みに該当する 2 つのクラスに分かれることを示している。しかし、その後のサブタイプ理論を基にした研究のほとんどは、悪性妬みと良性妬みに該当する2つの言葉がある言語圏において実施されており、該当する言葉のない言語圏での知見が不足している。

日本における悪性・良性妬みの研究

日本語で envy は「ねたましい」とも「うらやましい」とも翻訳されるが、「ねたましい」と「うらやましい」という 2 つの感情語には有意な正の相関があり、類似した日本語として使用されている(井上, 2016)。つまり、悪性妬みと良性妬みに該当する言葉がなく、2 つの妬みが概念的に区別されていない言語圏であると考えられる。

日本でもサブタイプ理論に基づく研究として、性格特性としての妬みにサブタイプを想定した研究が行われている。澤田・新井(2002b)は、小学生を対象とした特性妬み尺度を作成し、その尺度が優れた他者への敵意とその表出の意図を含む「他者疾視」と、自己が劣っているという認識とそれに苛まれた反応を含む「自己蔑視」の 2 因子に分かれることを示した。また、澤田・藤井(2016)は、悪性妬みと良性妬みの抱きやすさを同時に測定できる尺度として開発された Benign and Malicious Envy Scale(Lange & Crusius, 2015)を日本で実施し、Lange & Crusius(2015)と同様、悪性妬みと良性妬みに該当する 2 因子構造が得られることを確認した。さらに、良性妬みを抱きやすい大学生ほど学業において目標を高く設定することで良い成績を収めること(澤田・藤井, 2016)、中学生における自尊心の低さといじめへの加担の関連を悪性妬みの抱きやすさが媒介すること(澤田・金綱・鈴木, 2016)などが示されている。

このように、日本においても、性格特性としての妬みにサブタイプを想定できることは示されつつあるが、実際に優れた他者と遭遇した際に感じる妬みにサブタイプが想定できるかについては、研究が進んでいるとは言えない状況である。そこで本研究では、過去の妬み場面を想起させ、当時の感情がサブタイプに分かれ、異なる動機や行動を導くのか検討を行う。

妬みのサブタイプの測定に対する批判

Van de Ven et al.(2009)は、妬みには、感情、動機、行動において質的に異なる 2 つのタイプが存在しているという理論を唱えている。この理論によると、悪性妬みは強いいらつきを含み、優れた他者を傷つけることを目標とした行動を生じさせるのに対して、良性妬みはネガティブな感情であるものの、優れた他者に対しては好意を感じ、自分の状況を改善することを目標とした行動を生じさせると考えられている。しかし、実際に彼らが良性妬みを測定するために使用している項目は、「他者への賞賛を感じる」「他者が好きである」「他者からインスピレーションを感じる」といったポジティブな項目であり、良性妬みと似たポジティブ感情であるとされる賞賛(admiration)と区別して測定されていない。

また、サブタイプ理論を基にしたそれ以降の研究(Van de Ven et al., 2012; Crusius & Lange, 2014; Falcon, 2015)では、妬み場面における感情そのものではなく、感情によって生じる動機や行動を妬みとして測定している。例えば、Van de Ven et al.(2012)では、自分は昇給できなかったのに同僚は昇給したという内容の妬みを喚起させるシナリオを読ませた後に、「同僚が顧客を失うように密かに願うだろう」などの項目で悪性妬みを、「一生懸命働き始めるだろう」などの項目で良性妬みを測定している。この点に関して、感情と、感情によって生じる行動を混同しており、妬みが 2 つのタイプを持つのではなく、単一の妬みが 2 種類の行動を導くのではないかとサブタイプ理論を批判する研究者もいる(Cohen-Charash & Larson, 2017)。妬みが 2

つのタイプを持つとするサブタイプ理論を検証するためには、ともにネガティブ感情である悪性妬みと良性妬みを、動機や行動とは分けて、適切に測定する項目を作成する必要があるだろう。

これまでの妬み研究において、妬みは敵意を含む感情であると考えられてきた(e.g., Smith & Kim, 2007)。しかし、妬みの構成要素には劣等感も含まれるとする研究者もいる(Horney, 1937; 澤田・新井, 2002b)。澤田・新井(2002b)は、性格特性としての妬みが、敵意に対応する「他者疾視」と、劣等感に対応する「自己軽視」によって構成されていることを示した。敵意は優れた他者へのネガティブ感情であり、劣等感は劣った自己へのネガティブ感情である。これらの知見をサブタイプ理論に当てはめると、他者に向けられたネガティブ感情が生じると、敵意を含む悪性妬みが生じて、他者を低める行動が動機づけられ、自己に向けられたネガティブ感情が生じると、劣等感を含む良性妬みが生じて、自己を高める行動が動機づけられるのではないだろうか。

問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピング

サブタイプ理論に対するもう1つの批判として、妬みによって生じるコーピングの一部しかモデルに含まれていないことが指摘されている(Cohen-Charash & Larson, 2017)。妬みを始めとした、ネガティブ感情を生起させる問題への対処方略には、問題を解決することに焦点を当てた問題焦点型コーピングと、ネガティブ感情自体を低減させることに焦点を当てた情動焦点型コーピングがある(Lazarus & Folkman, 1984)。妬みを感じた際には、他者を低める、あるいは自己を高めることで、他者と自分に差があるという問題の解決を図る問題焦点型コーピング(e.g., Heider, 1958)と、回避や気分転換を行うことで、妬みという不快な感情自体の低減を図る情動焦点型コーピング(Berman, 2007; 澤田・新井, 2002a)の両方が行われることが示されている。しかし、サブタイプ理論のモデルの中では問題焦点型コーピングのみしか扱われておらず、悪性妬みや良性妬みと情動焦点型コーピングの関連を調べる必要があるだろう。

本研究の概要

本研究は、妬みのサブタイプ理論に基づく研究の問題点として、1)悪性妬みと良性妬みに該当する言葉のない言語圏での知見が不足している、2)良性妬みと賞賛が区別して測定されていない、3)妬みと妬みによって生じる行動を混同している、4)情動焦点型コーピングが含まれていない、という4点に注目した。これらの問題点を解決するため、悪性妬みと良性妬みに該当する言葉のない日本において、新たに作成した項目を用いて、妬み場面における感情がサブタイプに分かれ、異なる動機や行動を導くのか検討した。

具体的には、過去の妬み場面を想起させた後に、その場面について、当時感じた状況の評価(原因帰属)や感情、動機、実際に行った行動を回答させた。まず、この妬み場面における感情が、「妬み」と「賞賛」という2つの感情で構成されているとするモデルA、Van de Ven et al.(2009)と同様に「悪性妬み」と賞賛を含む「良性妬み」という2つの感情で構成されているとするモデルB、「悪性妬み」、「良性妬み」、「賞賛」という3つの感情で構成されているとするモデルC、という3つのモデルを想定し、確認的因子分析を行うことで、モデルの当てはまりの良さを比較した。次に、状況の評価や感情、動機、行動それぞれの相関を求めることで、サブタイプ理論が支持されるかどうか検討した。

状況の評価に関しては、これまでの研究で多く用いられてきた原因帰属を用いて検討した。相手の成功の原因を運や課題の難易度など外的要因に帰属した場合は悪性妬みが、相手の努力や能力に帰属し相手に相応しいと感じた場合は良性妬みが生じることが示されている(坪田, 1993; Van de Ven et al., 2012)。サブタイプ理論が支持される場合、相手の成功を外的要因に帰属するほど、悪性妬みを感じやすく、優れた他者を低める動機や行動が高まると考えられる。一方、相手の成功を内的要因に帰属するほど、良性妬みを感じやすく、自己を高める動機や行動が高まると考えられる。

また、妬みによって生じる動機や行動として、他者を低める、あるいは自己を高めることで、他者と自己の差を縮めようとする問題焦点型コーピングだけでなく、これまでサブタイプ理論が対象としてこなかった、気分転換を図ることで、妬みという不快な感情の低減を試みる情動焦点型コーピングを新たに用いた。悪性妬み・良性妬みと気分転換の関連については、探索的に調べた。

方法

調査参加者

首都圏の公立大学において教養科目を履修していた大学生155名を対象に調査を行った。回答に不備のない123名(男性63名、女性60名、平均年齢19.37歳)を分析対象とした[1)]。

手続き

授業時間内に、参加者全員に同じ質問紙を配布することで、集団調査を行った。参加者には日常生活の経験に関する調査であると説明した。まず、「あなたが誰かをうらやましい/ねたましいと感じた経験について、な

るべく詳細に記述してください」という教示で、妬みを感じた場面を自由に記述させた。その後、その経験について当時感じた、原因帰属や感情、動機、実際に行った行動に関する質問項目に回答を求めた。

質問項目

相手の成功を内的要因に帰属した程度を測定する項目として、Weiner の初期の帰属研究(Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest & Rosenbaum, 1971)の分類カテゴリー(努力、能力、運、課題の難易度)に相当する 4 項目を用いた。具体的には、相手が成功したのは「相手が努力したからだと思った」「相手の能力が高かったからだと思った」「運が良かったからだと思った(逆転項目)」「簡単だったからだと思った(逆転項目)」の 4 項目に対して、全く当てはまらない(1)―どちらとも言えない(4)―非常に当てはまる(7)の 7 件法で回答を求めた。

感情を測定する項目として、「相手に対してムカついた」、「相手に対してずるいと思った」、「いらいらした」という悪性妬み 3 項目、「劣等感を感じた」、「自分に自信がなくなった」、「焦りを感じた」という良性妬み 3 項目、「相手に対してすごいと思った」、「相手に対して憧れた」、「相手に対して尊敬した」という賞賛 3 項目、合計 9 項目を独自に作成して用いた。これらの項目に対して、全く当てはまらない(1)―どちらとも言えない(4)―非常に当てはまる(7)の 7 件法で回答を求めた。

動機や行動を測定する項目として、他者を低める、自己を高める、気分転換を図るという 3 種類の行動を用いた。前者 2 つは、他者と自己の差を縮めようとする問題焦点型コーピングであり、後者 1 つは、妬みという不快な感情の低減を試みる情動焦点型コーピングである。具体的には、「相手の邪魔をする」、「相手を悪く言う」という他者を低める行動 2 項目、「自分も相手と同じ状況になるように努力する」、「次の機会で挽回する」という自己を高める行動 2 項目、「気分転換をする」、「そのことについて忘れる」という気分転換を図る行動2項目、合計 6 項目を独自に作成して用いた。各項目において、「しようと思った」(動機)と「実際にした」(行動)の両方について、全く当てはまらない(1)―どちらとも言えない(4)―非常に当てはまる(7)の 7 件法で回答を求めた。

結果

妬み場面

参加者が記述した妬み場面の内容を、DelPriore, Hill, & Buss(2012)のカテゴリーを参考にして分類した。分類分けは2名の実験者で行い、意見が分かれた記述は、第三者に判断を委ねた。カテゴリー分類の結果を、Table 1 にまとめた。参加者が記述した妬み場面の内容は、多岐に渡っており、最も多かったものは、自己関与の強い領域(e.g., スポーツ、絵を描くこと)で相手が自分よりも才能があるという内容であった。次に多かったのは、仕送りやお小遣いなど、相手が自分よりも親からの援助を多く受けているという内容であった。妬みを感じた相手として、約半数の参加者が学校の友人を挙げていた。また、81.7%の参加者が過去 2 年以内、63.3%の参加者が過去 1 年以内に妬みを感じた場面を記述していた。

Table 1 妬み場面の内容のカテゴリー分類

カテゴリー	人数
自分にとって大事な領域で才能がある	21
親からの援助を多く受けている	12
恋人がいる	10
学業で成功している	10
充実した生活を送っている	10
知的である	8
モテる	7
コミュニケーション能力がある	6
自分が欲しいけれど持っていないものを持っている	6
身体的魅力が高い	5
経済的資源を多く持っている	4
楽な生活を送っている	4
自分にとって大事な領域で不当に良い評価をされている	4
実家が裕福である	3
運が良い	2
その他	11
合計	123

モデルの検証

妬み場面における感情が「妬み(敵意と劣等感)」、「賞賛」の 2 つの因子により構成されるとするモデル A と、「悪性妬み(敵意)」、「良性妬み(劣等感と賞賛)」の 2 つの因子により構成されるとするモデル B、「悪性妬み(敵意)」、「良性妬み(劣等感)」、「賞賛」の 3 つの因子により構成されるとするモデル C を想定し、確認的因子分析によってどちらのモデルが適切であるか検討した。モデルの適合度の指標として、適合度指標(GFI)、修正適合度指標(AGFI)、平均二乗誤差(RMSEA)を求めた。モデル A では GFI = .69, AGFI = .47, RMSEA = .26、モデル B では GFI = .70, AGFI = .50, RMSEA = .24、モデル C では GFI = .92, AGFI = .86, RMSEA = .09 であった。いずれの指標においても、モデル C は最も適合度が高く、あてはまりの良いことが確認された。よって、モデル C を採択することにした(Figure 1 参照)。このモデルによって得られた下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、「悪性妬み」が.81、「良性妬み」が.86、「賞賛」が.84 であり、内的整

合性は十分であると判断した。以上のことから、妬み場面におけるネガティブ感情は、質的に異なる 2 つの感情によって構成されていることが明らかになった。

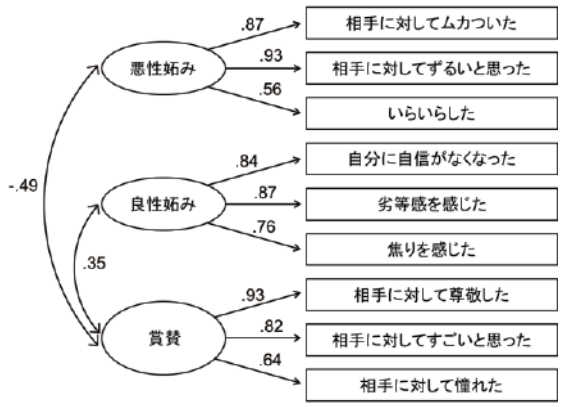

Figure 1 妬み場面における感情の確認的因子分析結果
(モデル C)

変数の算出

相手の成功を内的要因に帰属した程度を測定する 4 項目の平均値を算出し、「内的帰属」(α = .68)とした。動機を測定する項目のうち、他者を低める動機 2 項目の平均値を「他者妨害動機」(α = .79)、自己を高める動機 2 項目の平均値を「自己改善動機」(α = .63)、気分転換を図る動機 2 項目の平均値を「気分転換動機」(α = .62)として算出した。同様に、行動を測定する項目についても、「他者妨害行動」(α = .62)、「自己改善行動」(α = .66)、「気分転換行動」(α = .58)を算出した。

変数の相関

妬み場面における原因帰属、感情、動機、行動の関係を調べるために、これらの相関を求めた。Table 2 に、各変数の記述統計と相関を示した。悪性妬みと良性妬みには相関が見られなかった。相手の成功を内的要因に帰属しているほど、良性妬みや賞賛、自己改善動機が生じやすく、悪性妬みや他者妨害動機、気分転換動機・行動が生じにくかった。悪性妬みが高いほど、他者妨害動機・行動、気分転換動機・行動が生じやすかった。一方、良性妬みが高いほど、自己改善動機・行動が生じやすかった。また、他者妨害動機が高いほど他者妨害行動が生じやすく、自己改善動機が高いほど自己改善行動が生じやすかった。

考察

本研究は、妬みには社会的に望ましくない行動を導く悪性妬みと、社会的に望ましい行動を導く良性妬みという 2 つのタイプがあるとするサブタイプ理論が、悪性妬みと良性妬みに該当する言葉のない日本においても支持されるか検討した。結果として、日本においてもサブタイプ理論が支持された。妬み場面における感情が、妬みと賞賛という 2 つの感情で構成されているとするモデルと、悪性妬み・良性妬み・賞賛という 3 つの感情で構成されているとするモデルを比較したところ、後者のモデルが適切であることが示された。悪性妬みと良性妬みはどちらもネガティブな感情であるが、2 つの感情には相関が見られず、独立した感情であると考えられる。さらに、相手の成功を内的要因に帰属するほど、悪性妬みや優れた他者を低める動機が生じにくく、良性妬みや劣った自己を高める動機が生じやすいというサブタイプ理論の知見に一致する結果が得られた。これらのことより、日本においてもサブタイプ理論が支持され、サブタイプ理論は言語の種類に依存しないことが示唆された。

Table 2 妬み場面における原因帰属、感情、動機、行動の記述統計と相関

	内的帰属	悪性妬み	良性妬み	賞賛	他者妨害動機	自己改善動機	気分転換動機	他者妨害行動	自己改善行動	気分転換行動
内的帰属		-.42 ***	.44 ***	.62 ***	-.21 *	.35 ***	-.27 **	-.14	.16	-.28 **
悪性妬み			.11	-.43 ***	.49 ***	-.05	.57 ***	.37 ***	.08	.46 ***
良性妬み				.38 ***	.13	.49 ***	.18 *	.06	.28 **	.11
賞賛					-.32 ***	.35 ***	-.26 **	-.24 **	.15	-.17
他者妨害動機						-.01	.34 ***	.78 ***	-.02	.14
自己改善動機							.02	-.04	.71 ***	.02
気分転換動機								.31 ***	.13	.81 ***
他者妨害行動									.04	.08
自己改善行動										.17
M	4.57	3.82	4.62	4.60	1.90	4.68	4.11	1.54	3.76	3.78
SD	1.37	1.76	1.79	1.82	1.49	1.80	1.73	1.04	1.73	1.61

注) 内的帰属は得点が高いほど相手の成功を内的要因に帰属していることを示す。
*** : p < .001, ** : p < .01, * : p < .05

本研究の結果は、サブタイプ理論における研究の 3 つの問題点を解決したといえる。1 つ目の問題点は、良性妬みと賞賛が区別して測定されていないことであった。Van de Ven et al.(2009)は、良性妬みをネガティブな感情と定義していながら、「他者に対して賞賛を感じた」などのポジティブな項目を用いて良性妬みを測定していた。本研究では、妬み場面における感情をネガティブ感情とポジティブ感情に分けて測定することで、良性妬みに賞賛が含まれるか検討した。良性妬みに賞賛を含むモデルと、2 つの感情は独立しているとするモデルを比較したところ、後者の方が適切であることが示された。また、ネガティブ感情が向けられる方向性に注目することで、悪性妬みは敵意を含む感情であり、良性妬みは劣等感を含む感情であることを明らかにした。

2 つ目の問題点は、妬みと妬みによって生じる行動が混同されていることであった。この点に関して、本研究では感情と動機や行動をそれぞれ分けて測定した。結果として、妬み場面におけるネガティブ感情は悪性妬み・良性妬みというサブタイプに分かれ、悪性妬みは他者を低める行動を導くのに対して、良性妬みは自己を高める行動を導くことが確認された。

3 つ目の問題点は、サブタイプ理論のモデルに情動焦点型コーピングが含まれていないことであった。妬みを始めとした、ネガティブ感情を生起させる問題への対処方略には、問題を解決することに焦点を当てた問題焦点型コーピングと、ネガティブ感情自体を低減させることに焦点を当てた情動焦点型コーピングがある(Lazarus & Folkman, 1984)。しかし、これまでサブタイプ理論の枠組みの中では、「他者を低める」、あるいは「自己を高める」という問題焦点型コーピングしか扱われてこなかった。本研究では、新たに「気分転換を図る」という情動焦点型コーピングを測定する項目を作成し、悪性妬みや良性妬みと情動焦点型コーピングの関連を調べた。結果として、情動焦点型コーピングは良性妬みとはあまり関連が見られず、悪性妬みとは強い関連が見られた。日常生活において、他者を低める動機や行動は望ましくないとみなされ、自己を高める動機や行動は望ましいとみなされるだろう。そのため、優れた他者との遭遇によって、悪性妬みを感じた場合は、他者を低めるという問題焦点型コーピングよりも、悪性妬み自体を低減させる情動焦点型コーピングが行われやすかったと考えられる。一方、良性妬みを感じた場合は、自己を高めるという問題焦点型コーピングが行われやすく、良性妬み自体を低減させる情動焦点型コーピングが行われにくかったと考えられる。

今後の方向性

日本においても、他者を低める行動と関連のある悪性妬みと、自己を高める行動と関連のある良性妬みという 2 つのタイプの妬みが存在することが示された。しかし、本研究の限界点として、経験想起による相関研究であることが挙げられる。参加者は、過去に妬みを感じて対処した場面を思い出し、当時感じた感情や行った行動を回答した。そのため、悪性妬みを抱いたから他者を低める行動をとったのか、他者を低める行動をとったからそれを正当化するために他者へのネガティブ感情を抱いていたと回想されたのかは明らかではない。今後は因果関係を明らかにするために、悪性妬みや良性妬みを実験場面で生じさせ、参加者がどのような動機を抱き、どのように行動するかを明らかにすることが求められるだろう。

本研究では、従来から検討されてきた「他者を低める」、「自己を高める」といった問題焦点型コーピングだけでなく、サブタイプ理論のモデルに含まれていなかった「気分転換を図る」といった情動焦点型コーピングと、悪性妬みや良性妬みの関連についても検討した。結果として、悪性妬みを感じたときは両方のコーピングが行われるが、良性妬みを感じたときは問題焦点型コーピングが行われやすいことが明らかになった。悪性妬みを感じた際、優れた他者を低める問題焦点型コーピングが望ましくないとされる場面では、代わりに気分転換を図る情動焦点型コーピングが行われると考えられるが、どのような状況がその調整要因となっているのか、今後明らかにする必要があるだろう。

引用文献

Ben-Ze'ev, A. (2002). Are envy, anger, and resentment moral emotions? *Philosophical Explorations*.

Berman, A. (2007). Envy at the cross-road between destruction, self-actualization, and avoidance. In L. Navaro & S. L. Schwartzberg (Eds.), *Envy, competition, and gender: Theory, clinical applications and group work* (pp. 17–32). New York, NY: Routledge.

Cohen-Charash, Y., & Larson, E.C., (2017). An Emotion Divided: Studying Envy Is Better Than Studying "Benign" and "Malicious" Envy. *Current Directions in Psychological Science*, *26*, 174-183.

Crusius, J., & Mussweiler, T. (2012). When people want what others have: The impulsive side of envious desire. *Emotion*, *12*, 142-153.

Crusius, J., & Lange, J. (2014). What catches the envious eye? Attentional biases within malicious and benign envy. *Journal of Experimental Social Psychology*, *55*, 1–11.

DelPriore, D. J., Hill, S. E., & Buss, D.M. (2012) Envy: Functional specificity and sex-differentiated

design features. *Personality and Individual Differences*, *53*, 317-322.
Falcon, R. G. (2015). Is envy categorical or dimensional? An empirical invenstigation using taxometric analysis. *Emotion*, *15*, 694-698.
Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York, NY: John Wiley & Sons.
Horney, K. (1937). *The neurotic personality of our time*. New York: W.W. Norton & Company.
井上裕珠. (2016). 資源分配における妬みの適応的機能 ―資源所有者の分配志向性と資源の分割容易性の影響― 一橋大学大学院社会学研究科博士論文. http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/27764/7/soc020201502103.pdf
Lange & Crusius (2015) Dispositional Envy Revisited: Unraveling the Motivational Dynamics of Benign and Malicious Envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *41*, 384-294.
Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). The Stress Concept in the Life Sciences. *Stress, Appraisal, and Coping*.
Parks, C. D., Rumble, A.C., & posey, D. C. (2002). The effects of envy on reciprocation in a social dilemma. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28*, 509-520.
Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1993). Distinguishing the Experiences of Envy and Jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 906-920.
澤田匡人・新井邦二郎. (2002a). 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響 教育社会心理学研究, *50*, 246-256.
澤田匡人・新井邦二郎. (2002b). 児童・生徒用妬み測定尺度の作成 筑波心理学研究, *24*, 219-226.
澤田匡人・金綱知征・鈴木雅之. (2016). 悪性妬みはいじめを助長するのか？ 感情心理学会第 24 回大会論文集.
澤田 匡人・藤井 勉. (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか？―良性妬みに着目して―. 心理学研究, *87*, 198–204.
Schoeck, H. (1969). *Envy: A theory of social behavior.* New York: Harcourt, Brace and World.
Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls & L. Wheeer (Eds.) *Handbook of social comparison*: Theory and research (pp.173-200). New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.
Smith, R. H., & Kim, S. H. (2007). Comprehending envy. *Psychological Bulletin, 133*, 46–64.
坪田雄二. (1993). 原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響 実験社会心理学研究, *33*, 60-69.
Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters. (2009). Leveling Up and Down: The Experiences of Benign and Malicious Envy. *Emotion*, *9*, 419-429.
Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters. (2012). Appraisal patterns of envy and related emotions. *Motivation and Emotion*, *36*, 195-204.
Weiner, B., Frieze, I, H., kukla, A., Reed, L., rest, S., & Rosenbaum, R. M. (1971) *Perceiving the causes of success and Failure.* New Jersey: General Learning Press.

註

1) 本研究では、同じ項目に対して「しようと思った」(動機)と「実際にした」(行動)の両方について回答を求めたが、教示が正しく伝わらず、15 名の参加者が両方に回答していなかった。この 15 名と、妬み場面を記述しなかった 13 名、回答漏れのあった 4 名を合わせた 32 名を分析から除外した。

Malicious and benign envy and their measurement issues:

Do two types of envy exist among the Japanese?

Ayaka NAKAI (*Graduate School of Human Science, Tokyo Metropolitan University*)
Makoto NUMAZAKI (*Graduate School of Human Science, Tokyo Metropolitan University*)

Envy is a painful emotion that arises from social comparisons with others. Recent research has identified two types of envy; malicious and benign. The present study investigated whether these envies also exist among the Japanese. Participants in the study were asked to describe a situation in which they experienced envy. Next, they answered certain items measuring their causal attribution of other people's high achievement, feelings toward themselves and others, motivations (including pulling others down, seeking to advance oneself, and emotion-focused coping) and actions. The data fit the two-subtype model of envy better than the single-type model. They showed that malicious envy led to a pulling-down motivation aimed at damaging the position of person viewed as superior, whereas benign envy led to a moving-up motivation aimed at improving one's own position. These results suggested that the types of envy existed among the Japanese. Furthermore, malicious envy caused people to engage in both problem-focused and emotion-focused coping, whereas benign envy caused only problem-focused coping.

Keywords: envy, social comparison, causal attribution, problem-focused coping, emotion-focused coping